<table>
<tr><td colspan="3">団体名</td><td>特定非営利活動法人　黒潮実感センター
（高知県幡多郡大月町）　http://online.divers.ne.jp/kashiwajima/</td></tr>
<tr><td rowspan="4">団体の概要</td><td colspan="2">活動開始年</td><td>西暦　1998 年 7 月　活動開始
西暦　2002 年 10 月　特定非営利活動法人格取得</td></tr>
<tr><td rowspan="2">メンバー</td><td>人数</td><td>＜役員数＞17 名　　＜事務局スタッフ数＞　3 名（有給 3 名）
＜その他＞友の会会員約 400 名</td></tr>
<tr><td>構成</td><td>研究者、学生、漁業者、ダイバー</td></tr>
<tr><td colspan="2">予算規模</td><td>平成１３年度概算
･収入　\14,000,000
･支出　\14,000,000</td></tr>
<tr><td colspan="3">団体の目的</td><td>透明度 20mを越す澄んだ海と色とりどりの熱帯魚やサンゴたちに囲まれた高知県大月町柏島を「島がまるごと博物館」と捉え、海のフィールドミュージアムにしていく。海からの恵みを受けている人が、恩恵を享受するにとどまらず、海を耕し守っていく、人と海が共存できる場所としての「里海」づくりを目指す。</td></tr>
</table>

①活動の概要

活動の舞台である柏島周辺の海は、世界的に見ても魚類の多様性に富んだ海域である。そこで、「みんなでつくろう、豊かな『里海』」をキャッチフレーズに、以下３つの取り組みを行っている。「里海」とは、人が海からの豊かな恵みを享受するだけでなく、人も海を耕し守る（美しい海は人の生活があるゆえにつくられる）、人と海とが共存できる場所を示すコンセプトである。

■自然を実感する取り組み（研究と環境教育・環境学習）

･海洋生物の調査研究や海洋セミナーの実施
･海の環境学習会や体験学習の開催
･エコツアーの開催
（学術面からの研究を行うと共に、地域内外の人々に柏島の海のすばらしさを実感してもらう）

■自然を活かす暮らしづくり（島おこし、地域振興）

･住民の物産販売「里海市」への参加
･望ましいかたちでの海洋資源活用の振興
･豊かな漁場づくりのお手伝い

■自然と暮らしを守る取り組み（環境保全）

･海洋環境の定期的な調査を実施

･サンゴや藻場の保全活動

･自然と暮らしを守るルール作りのお手伝い

②組織運営の概要

組織体制は役員 17 名（内常勤理事 2 名、非常勤理事 1 名）、職員 4 名（常勤理事を含む）である。役員は、総会において正会員の中より選任され、任期は 2 年である。

意思決定の方法は、総会の議決による。

③元気に活動している要因

＜要因１：多様なボランティアとの連携＞

黒潮実感センターの活動が火付け役となって、島の現状に危機意識を持った住民有志による「島おこしの会」が結成された。同会は島の未来について真剣に議論を重ね、かつ様々なイベントも実践している。黒潮実感センターは同会と連携しており、例えば、同会が行っている「里海市」に参加している。地元からの理解を得ることが非常に重要であり、膝をつき合わせて話す環境づくりを大切にしている。また、同会のメンバーの多くは黒潮実感センターのボランティアでもある。

一方で、島の外の人（島内出身者を含む）からの支援も重要であり、そのためにボランティア組織「里海ファン」を組織している（年会費 3,000 円）。ホームページ作成や、島外でのシンポジウムの手伝いなどをしてくれている。会員は講演会や体験学習・エコツアーの参加者が入る場合もあれば、島内出身者がメディアを通じてセンターの活動を知って入会することもある。

また、センター長が高知大学で非常勤講師を務めている関係もあって、学生による「柏島ファンクラブ」も結成されている。彼らはエコツアーのサポートなどのボランティアをしてくれている。

黒潮実感センターの活動は、こうした多様なボランティアに支えられている。

＜要因２：関係組織との連携＞

上記のボランティアに加え、柏島区役場・大月町・高知県という行政とも連携しており、それぞれが目的に向かって協力し合っている。

また、高知大学も自然科学・社会科学両面から柏島を研究のフィールドとして位置付け、連携している。黒潮実感センターはこうしたアカデミックな側面も持っているのも特徴である。

＜要因３：事務局内の役割分担＞

以前は現在のセンター長が１人で事務局の役割を担っていた。現在は常勤理事を含めて実質４名の事務局体制となっている。

事務局長は大手都市銀行の出身で、様々なボランティア活動の経験も有している。そうした経験を活かして、主に渉外（町役場をはじめとした地域の人々との交渉等）の役割を担っている。また、事務スタッフは事務全般及び会員向けの情報発信を担当している。

また、センター長が１人ですべてを対応していた頃と異なり、スタッフ会議を開いて協議することで、多様な見方、考え方が出来るようになっている。

＜要因４：活動の舞台である「柏島」の魅力＞

「柏島」そのものの魅力が大きい。20mを超える透明度の美しい海とそこで生きる約 1000 種類の魚たち、島に暮らす人々の素朴さ、優しさ、温かさ。センターの趣旨に賛同して活動に参加する人々は、島の魅力が話やパンフレットの上だけのものではないことに感動し、その「柏島」の環境を守っていく活動と島の人々をより豊かにする可能性を秘めた「里海」づくりの活動に寄与できることに大きな喜びを見出していく。

春から秋に実施する「体験学習」を手伝うボランティアは、海の魅力、生き物たちの面白さ・たくしまさを体感することで、自然の力に喜びとエネルギーをもらい、次の活動や普段の生活に活力を得て、流行の言葉で言うと「癒されて」都会へ戻っていく。

＜要因５：他の組織の人から元気をもらい、次の協力関係を生み出す＞

活動をアピールし、賛同者を増やすために行う講演会やシンポジウムには、自ら生き生きと（元気に）活動している他組織の人にパネリストとして加わってもらうことで、新たな風を吹き込む効果を得るとともに、次の連携・協力関係が生み出されている。

④今後の課題と展望

黒潮実感センターが目指すものは、「持続可能な『里海』づくり」であり、環境保全と島興しを同時に進めようとする活動である。島に住む人々抜きには、センターそのものがあり得ない。従って、一番の課題は、島民の日々の営みを大切にしつつ行う環境保護、「里海」づくりを、いかに島民のコンセンサスを得ながら行っていけるかである。島民のコンセンサスを得るには、コミュニケーションを積み重ね、活動内容を詳細に知ってもらうと同時に、センターの活動によって、どのようなメリットがもたらされるのか具体的に示すことが肝要だが、それが難しい。また、NPO という組織形態を理解してもらうことも難しい。

体験学習は、学習内容やリスク管理を含めて、プロフェッショナルとしての仕事が要求される。しかし、「環境」も「教育」も、なかなかお金を取るのが難しいのが現状である。今後は地元向けには無償で、地域外には有償で活動を行っていきたい。また、エコツアー

参加者を会員として、継続的に情報発信するなどの工夫もしたい。

今後、島の対岸にトンネルが開通する見込みであり、来島者数の増加も予想される。「島おこしの会」を中心に、持続可能な島づくりのための「里海憲章」づくりを検討したい。

また、町とは様々な面で連携をしているが、一方で、NPO としての自立性も必要である。

現在は活動形態が多岐にわたっているが、NPO 自体が持続可能となるためには、今後は活動に優先順位を付けていくことが必要となるかもしれない。

(団体事務局スタッフによるレポート、団体センター長･事務局長へのヒアリング調査、団体資料より作成)

＜この事例のポイント＞

環境保全、環境教育、研究、そして地域振興と多様な活動を行う NPO であるが、それを支えるボランティアも多様である。地元である島内にも、島外にも支援者であるボランティアがいることが、この NPO を支えていると言っていいだろう。

活動は地域に密着したものであるが、代表を務めるセンター長も、事務局長も、地域（島）の外から来た「よそ者」である。そのため、地域から理解を得ることが非常に重要であり、島内のボランティアや行政組織との協力は重要である。また、島外に住む島内出身者の理解を得て、彼らの口を通して、島民の理解を得ることも重要である。

また、地域外の他の団体との連携に積極的に取り組むことで、活動に対する刺激を受け、活動を活性化させている。外部のネットワークをうまく活用しているといえる。